

成均館・吉林大学交流プログラム【オンライン】実践報告

藤原 祐子（岡山大学教育推進機構）・秋田 節子（岡山大学非常勤講師）
石井 友美（岡山大学教育推進機構）・佐藤 美穂（岡山大学非常勤講師）

Online Exchange Program between Sungkyunkwan University, Jilin University, and Okayama University
: Practice Report

Yuko FUJIWARA, Setsuko AKITA, Tomomi ISHII, Miho SATO
(Institute for Promotion of Education and Campus Life, Okayama University)

要旨

岡山大学教育推進機構初修外国語系が毎年2月にオンラインで実施している「成均館・吉林大学交流プログラム」は、日中韓三カ国の大学の学生が、日本語を共通言語として、複数の文化・言語、学習言語と母語の違いなどを包摂した場で生じるコミュニケーション上の問題を解決しながら、様々な話題のディスカッションやプレゼンテーションを行なう。本実践報告は、このプログラムの趣旨と成果、また実践に当たっての様々な課題とそれに対する取り組みについて報告し、コロナ後の国際交流の一つのモデルとなることを期待するものである。

Abstract

The Institute for Promotion of Education and Campus Life at Okayama University hosted 5th annual Sungkyunkwan University (South Korea) and Jilin University (China) Exchange Program online. This program convened Sungkyunkwan University students, Jilin University students, and Okayama University students to engage in discussion, exploration, and presentation of cultural topics. While participants used Japanese as their common language, they addressed and overcame communication challenges that arise due to language barriers and cultural differences. The current report explores the program's significance for global citizenship education, program's results, several issues encountered during its implementation, and actions to resolve those issues.

キーワード：三国間交流，異文化理解，複言語・複文化主義，インクルージョン，アクティブラーニング

1. はじめに

「成均館・吉林大学交流プログラム」は、岡山大学教育推進機構初修外国語系が主体となって実施している、日本（岡山大学）・韓国（成均館大学校）・中国（吉林大学）の三

カ国の大学生が、日本語を共通言語として、オンライン上でディスカッションやプロジェクトワークを行う、非常にユニークなプログラムである。本実践報告では、プログラム発足の経緯と具体的な実践内容について報告し、併せて今後の課題・展望について述べる。本報告を通じて、コロナ以後の国際交流実践のあり方に、一つの可能性を示したい。

2. 「成均館・吉林大学交流プログラム」発足の経緯

2.1 「成均館大学校交流プログラム」（2006年度～2018年度）

「成均館・吉林大学交流プログラム」の前身は、「成均館大学校交流プログラム」である。このプログラムは、本学の協定校である成均館大学校（韓国ソウル市）からの受託事業として2006年度に発足した。岡山大学外国語教育センター初修外国語系（当時。現教育推進機構初修外国語系）が受け入れ先となり、成均館大学校の学生たちに約3週間の日本語研修と日本文化体験を提供した。韓国政府からの資金援助が打ち切られた後も、存続を望む声が非常に大きく、2009年度以降は外国語教育センターの予算で、2011年度～2020年度はキャンパスアジア事業からも資金を得て運営された（ただし、2019・2020年度については「成均館・吉林大学交流プログラム」として実施）。

2.2 「成均館・吉林大学交流プログラム」（2019年度～）

発足から2018年度までは、成均館大学校からの学生のみを受入対象としていたが、2019年度より同じくキャンパスアジア協定校である吉林大学（中国長春市）の学生も併せて受け入れる体制となり、プログラム名も「成均館・吉林大学交流プログラム」に変更された。新体制での初年度は、新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行により全面中止とせざるをえなかったが、翌2020年度に、日本語授業担当教員の協力の下、Zoomによるリアルタイム・オンライン授業（1週間）として再開された。2021年度からは、岡山大学の春季集中講義としても開講し、岡山大学・成均館大学校・吉林大学という三カ国の大学生（大学院生を含む）の相互理解・相互交流促進の場となっている。

2.3 岡大生の役割の変化

発足当初からオンライン開催初年の2020年度まで、岡山大学の学生（以下、岡大生）はこのプログラムにボランティアとして参加し、成均館大学校の学生（以下、成大生）の日本語学習や日常生活のサポートを行っていた。しかし、2021年度からは学部生向けの春季集中講義として開講することにした（「知的理解（現代と社会）」1単位）。

集中講義化に踏み切った理由として、主に以下の二点が挙げられる。

- ① このプログラムはディスカッションやプレゼンテーションといった活動がメインであることから、岡大生の側にも中韓の学生と対等な参加意欲が必要となる。また、

ボランティアという立場のままでは、長時間拘束されるオンライン授業に継続的に参加することを求めにくい。

- ② 後述するように、本プログラムは最終日にグループ毎のプレゼンテーションを実施しており、発表グループは、原則として各大学から 1 名ずつの 3 名で構成される。このため、各大学の参加人数は等しいことが望ましいが、オンライン授業を実施する上では、無制限な参加者の増大は避ける必要がある。

以下では主に 2021 年度以降、オンライン授業として実施された当プログラムについて紹介していく。

3. プログラムの趣旨及び基本情報

当プログラムの前身である「成均館大学校交流プログラム」と、2019 年度の「成均館・吉林大学交流プログラム」は、成均館大学校と吉林大学の日本語を学ぶ学生を対象とした日本語・日本文化プログラムとして設計されていた。そのため、授業自体に岡大生が関わる事はなく、プログラムに参加するために来た学生達が 2~3 週間岡山に滞在するに当たって、日常生活のサポートや会話練習の相手として交流するのが基本であった。

コロナ禍の中、「成均館・吉林大学交流プログラム」をオンラインプログラムとして再開するに当たり、担当教員間で会議を重ね、このプログラムを次のような趣旨で実施する事で合意した。

- ・日中韓三ヶ国の大学生同士が異文化への理解を深め、共に成長できる場とする。
- ・ディスカッションとプレゼンテーションをプログラムのメイン活動とし、学生同士が交流する機会をできるだけたくさん確保する。
- ・この授業では以下のことを重視する。
 - ① 参加者間の言語能力や文化・価値観に差がある中で、それらを包摂し、どうしたら伝わるのかを一緒に考えたり提案することができる人材を育てる。
 - ② 全ての学生がある言語の母語話者であると同時に、ある言語の学習者でもあることを自覚し、複言語話者として持てる能力をすべて活用して、コミュニケーション上の問題を双方の努力によって解決する力をつけていくための「練習の場」とする。

3.1 募集方法及び参加者

本プログラムの参加者募集は、岡大生に対しては例年 11 月初旬から 12 月初旬、成大生・吉林大学の学生（以下、吉大生）に対しては 11 月初旬から 1 月初旬にかけて行われる。2023 年度の募集方法及び応募要件等は、以下の通りである。

【岡大生】

①募集方法：

- ・教育推進機構HPに募集要項および申込書の掲載
- ・中韓両言語のクラスに於ける授業時及びMoodle上でのアナウンス

②募集人数：10名⁽¹⁾

③応募要件：

- ・岡山大学に在籍する正規学生（科目等履修生は除く）であること
- ・岡山大学で中国語或いは韓国語の初級Ⅰおよび初級Ⅱ（あるいはそれに相当する文学部専門科目）の単位を取得していること
- ・他者とのコミュニケーションに於ける困難を克服しようとする意欲を持ち、そのための努力が出来ること

④選考方法：

- ・所定の書式にて提出された申込書及び成績証明書（履修中の科目も含む）の内容により、初修外国語系系委員会にて選考・承認

【成大生・吉大生】

①募集方法：

- ・成均館大学校・吉林大学の担当者に募集要項を送付して募集を依頼する

②募集人数：各大学10名（計20名）

③応募要件：

- ・日本語N3以上または同程度の学習経験を有すること
- ・他者とのコミュニケーションに於ける困難を克服しようとする意欲を持ち、そのための努力が出来ること

④選考方法：

- ・各大学にて所定の人数を選考後、参加者名簿を岡山大学担当教員に送付
- ・初修外国語系系委員会にて選考結果を承認

2019年度～2023年度の参加者数とその内訳は以下の通りである。ただし、前述のように、2019年度はCOVID-19の世界的流行により、やむを得ず中止となっている。

表1 プログラム参加者数

年度	参加者数		
	成均館※1	吉林	岡山
2019年度	12名（男5女7）	4名（男3女1）	42名 ※2
2020年度	8名（男5女3）	6名（男2女4）	11名（男2女9）
2021年度	8名（男2女6）	10名（男2女8）	9名（男2女7）※3
2022年度	10名（男3女7）	10名（男5女5）	12名（男0女12）

2023年度	8名（男4女4）	7名（男2女5）	10名（男2女8）※4
合計	46名（男19女27）	37名（男14女23）	42名（男6女36）

※1 中国人留学生（2019年度3名、2020年度1名、2022年度1名、2023年度1名）を含む。

※2 ボランティアとして募集した。

※3 うち1名は、社会文化科学研究科所属の大学院生。全日程に出席する事を条件に、参加を許可した。

※4 うち1名は、中国語を学習している韓国人留学生。

表からわかるように、全体的な傾向としてどの大学も男子学生よりも女子学生の参加が目立つ。とりわけ顕著なのは岡大生で、女子学生は参加者全体の85%にのぼる。

次に、岡大生の参加者の学部ごとの内訳は以下のとおりである。

表2 学部別参加者数※1

学部	人数	学部	人数	学部	人数
文学部	11名	理学部	1名	工学部	9名
教育学部	1名	医学部	5名	環境理工学部	3名
法学部	1名	歯学部	0名	農学部	1名
経済学部	6名	薬学部	1名	GDP	2名

※1 2021年度の大学院生1名は数に含まない。

文学部は一般的に言語学習への関心が高い傾向にあるが、このプログラムに於いても最多の11名、約4分の1を占めている。次いで多いのが工学部で、毎年必ず数名の参加者がいる。ここ数年、工学部に於ける中国語・韓国語の履修者は増加傾向にあり、これは中韓のIT関連技術の発達が著しいことが原因の一つとなっているが、このプログラムへの参加者数の多さもその影響を一定程度受けていると想像される。

3.2 経費及び必要設備

本プログラムはオンラインで実施されるため、学生の履修にかかる経費負担はない（対面時は渡航費や滞在費等が発生）。ただし、オンライン授業という特質上、履修に当たっては、①安定的なインターネット環境、②インターネットに接続できる機器（webカメラ・マイクを含む）を整えるよう、応募要項に明記した。また、授業中には学生自身も頻繁にPPTや画面の共有を行う必要があるため、機器としてはタブレットやスマホではなく、デスクトップパソコンやノートパソコンの使用を推奨した。

3.3 使用ツール

3.3.1 Zoom

授業はすべてZoomを使って実施される。メイン授業用の初修外国語系のアカウントで作成したミーティングURL、および2～4日目の午前中のテーマ別ディスカッション授業用

に担当教員 2 名がそれぞれ個別に作成したミーティング URL が、事前に岡大 Moodle のコースページ上で学生に周知・共有される。学生は授業時間になれば自分で接続すべき URL を確認し、そこから授業に参加する。

なお、例年主に中国人学生に、Zoomへの接続トラブルが発生している。これはインターネット環境に制限が多い中国特有の事情が関係していると考えられるが、例えば、2023 年度では 2～4 日目の午前中の授業で Zoom に入れない学生が 4 名いた。VPN 等様々な方法を模索した結果、うち 3 名は入れたものの、1 名は最後まで入れなかった。そのため、急遽その 1 名が問題なく入ることができていたメイン授業用のミーティング URL を午前授業でも使用する、という対応を取った。

こういったトラブルは、発生するかどうか実際に授業を始めてみないとわからないということもあり、事前対処が難しい。ただ、今回のトラブルは初修系で契約している有料版アカウントでは全く発生しなかったことから、もう一つ予備のアカウントを、このプログラムの時期にのみ一時的にでも追加で契約することは、有効な手段と思われる。予算の関係もあるため、今後の検討課題としたい。

なお、オンライン・リアルタイム授業であることから、Zoom での授業中は原則としてカメラはオンにし、お互いの顔が見える状態で参加することを求めている。しかし、ごくわずかではあるが、カメラオフで参加しようとする学生もいた。2023 年度から応募要件に「他者とのコミュニケーションに於ける困難を克服しようとする意欲を持ち、そのための努力が出来ること」が加わったのは、そういった学生への対応の一環である。

3.3.2 岡山大学 Moodle

授業資料の掲載や課題の提出場所として、岡山大学の Moodle を使用した。成大生・吉大生は、参加者が確定した後、担当教員が手動でローカル ID を取得し、各人に ID とパスワードを通知している。

学生は毎日 Moodle でその日の予定を確認し、授業に参加する。事前課題をはじめとする提出物も、全てこの Moodle コースページ上に提出場所を作成し、このページを開けば授業に必要な活動は全て完結できるよう設定した。

岡大生は当然普段から他の授業で使用しているため、問題なく使いこなしている。これに対し、成大生・吉大生は最初の接続でトラブルが生じることが多い。最も多いのは、「岡大 ID でログイン」しようとしてしまい、結果ログインできない、というケースである。このため、通知の段階で「ローカル ID でログイン」するよう、注意喚起を行っており、2023 年度には追加でログイン方法を示した資料も作成して、各学生に送付した。これにより、ほぼ全員が正しくアクセスできた。

3.3.3 Microsoft Forms

学生からのリフレクションを集める手段として主に用いた。2021年度までは、毎日のリフレクションを Word ファイルの形式で学生に提出させていたが、学生から負担が大きいとの意見が寄せられ、2022年度から Microsoft Forms の使用に踏み切った。QR コードを Zoom の画面上に提示することで、即時アクセスも可能となり、学生にとっての利便性が大幅に向上した。教員側にとっても、リフレクションの確認・集計等の作業が容易になるという利点があった。

3.3.4 SNS (LINE、CacaoTalk、WeChat)

授業期間中の急な欠席やトラブルの連絡に対応するため、事前に各大学の参加者と SNS でグループを作成している（吉大生 2019 年度～、岡大生・成大生 2023 年度～）。また、岡大生と成大生対象のオリエンテーションでは、中国では WeChat 以外の SNS は原則使えないことを周知したうえで、授業外でも学生同士の交流を図る手段として、WeChat のインストールを推奨した。ただし WeChat は、iPhone では基本的に問題なくインストールできるが、Android のスマホではダウンロード制限がかかり、インストールできない場合がある。そのため、その他の連絡方法（メールなど）もグループ内で相談するよう指導している。

3.3.5 Miro

オリエンテーションやディスカッションの際のグループワークでは、ホワイトボードアプリの Miro を活用した。Miro は、一つの画面で複数のグループ活動を同時に行えるため、ブレイクアウトセッション後の全体共有やフィードバックが非常に容易である。学生達のほとんどが、このプログラムで初めて Miro を使うが、瞬時に使いこなしていくのには本当に驚かされる。ただし、Miro は動作が若干重く、画面が表示されるまでやや時間が掛かるのが難点。今後、より使い勝手の良い共有ボードの使用を模索したい。

4. プログラム内容

4.1 オリエンテーション

プログラム開始前の 1 月中旬から下旬にかけて、参加者を対象としたオリエンテーションを大学別に実施する。2023 年度のオリエンテーションは、岡大生は対面（2024 年 1 月 19 日）、成大生・吉大生はオンライン（2024 年 1 月 26 日）で実施した⁽²⁾。

オリエンテーションでは、主に以下のような活動を行っている。

- ①自己紹介
- ②プログラムの概要説明
- ③グループ別セッション

このプログラムは、どの大学でも全学から参加者を募集しており、学生達の多くはオリエンテーションで初めて出会うことになる。限られた時間でより深いディスカッションができるようになるためには、このオリエンテーションで少しでもよくお互いのことを知っ

ておく必要がある。そのため、①では「自己開示」を意識した自己紹介をするよう、指導を行う⁽³⁾。また、今後のプログラムで教員と学生間の連絡をスムーズにするため、それぞれの大学グループでリーダー役を決めてもらう。立候補が無い場合はこちらで自己紹介の様子を見て指名するが、2023年度については各大学とも立候補者がおり、スムーズに決定する事ができた。

②では、プログラムの趣旨のほか、授業開始までの間に取り組んでもらう事前課題について説明を行い、同時に最終日のプレゼンテーションについて前年度までのサンプルや資料動画を示す。後述するように、このプログラムのメインは最終日のプレゼンテーションであり、オリエンテーションの段階でプレゼンテーションを完成させるための具体的なイメージを持ってもらっておくことは、プログラムを運営する上で極めて重要となる。また、岡大生に対しては、日本語学習者の学習をサポートする、という観点から、「分かりやすい日本語」とはどのようなものか、「伝わる」かどうかは語彙や文法の正確さだけで決まるわけではないこと、上手く伝えるためにはどのような工夫をすれば良いか、といった内容のレクチャーも行った。

③では、プログラムでグループとして協力し合うための下地作りとして、2～3人の少人数に分かれてセッションを行う。例えば、2023年度の岡大生のオリエンテーションでは、次のような活動を行った⁽⁴⁾。

(1)「絵を描いてみよう」(個人)

一人につき A3 用紙一枚とマーカーを配付し、与えられたテーマに沿った絵を描く。書き終わったら、お互いに見せ合う。日本人同士、同じお題でも違うものがイメージされることがある、という「違い」への気づきを促進することができる。

(2)「共通点を探せ」(グループ・競争)

3人グループをつくり、メンバーの共通点を探して紙に書く。一つでも多く書いたグループを勝ちとする。共通点を見つけるためにはお互いに対して関心を持ち、積極的に会話をする必要がある。

(3)「テーマ集め」(グループ)

(2)と同じグループメンバーで、プログラムの最終プレゼンテーションで取り上げてみたいテーマについて話し合う。その上で、Moodle から Miro にアクセスし、書き出してもらった。図1は、それぞれのグループが実際に作成した Miro の画面である。

図1 オリエンテーション成果



後掲のプレゼンテーションテーマ一覧を見て頂ければ分かるが、ここには既に、2023年度のプレゼンテーションで取り上げられたテーマの大半が上がっている。SNS やアニメ、アイドルや音楽といったサブカルチャーから、アルバイトや就活、大学受験といった学生生活に密着したテーマ、また食文化や選挙・税金制度、さらに結婚観といった社会的文化的テーマまで、学生達の幅広い関心を窺うことができる。

なお、成大生・吉大生対象の各オリエンテーションでは、オンラインという制限上、(2)の「共通点を探せ」をメインにグループ活動を行った。オリエンテーション自体は日本語で実施したが、このグループ活動ではたくさん会話をしてお互いへの理解を深めることを重視しているため、ディスカッションでは母語を用いることを推奨した。話した内容については、やはり Miro を用いてそれぞれのグループ毎にまとめてもらった。

オリエンテーション後には、Microsoft Forms を使ったアンケートを実施して理解度を測ると共に、疑問のある人は自由記述で書き込みができるようにした。書き込まれた疑問に対するフィードバックは、授業開始前に Moodle 上で行っている。2023 年度は、後述の言語別セッションのレベルと準備、プレゼンテーションのグルーピングの方法等についての質問が寄せられた。

4.2 事前課題

本プログラムでは、1 週間という短い授業期間を有効活用するために、参加者には以下の事前課題への取り組みを求めている。提出場所は岡大 Moodle 上である。

①以下の3つのテーマについて、それぞれ PPT のスライドを各 1 枚（計3枚）作成する。スライド作成に当たっては、写真やイラスト等を活用し、文字での説明は避けること。

a. 「一週間に食べたもの」 b. 「好きなもの・ひと」 c. 「好きな場所」

②1 分程度の自己紹介動画を作成する。その際、必ず日本語を用いること。

③提出期限後に Moodle 上に掲載される参加者全員の自己紹介動画を、プログラム開始前に必ず見ること。

①で取り上げるテーマは3つとも、プログラム1日目で実施するグループセッションのトークテーマとなる。また、2~4日目の言語別セッションでも用いる。そのため、岡大生には自分の学習言語（中国語或いは韓国語）で、自分がスライドに載せたものや人・場所をどのように表すかを、単語レベルで構わないので調べておくよう指示した。

②③については、学生達が自分の大学以外の参加者について、ある程度の事前情報を得られるようにすることが最大の目的である。また、教員にとって、この動画から分かる成大生・吉大生の日本語レベル、各人の興味関心の所在は、最終プレゼンテーションのグループ分けを考える際の重要な判断材料となっている。

4.3 授業期間及び授業スケジュール

ここからの内容については、文末資料の「2023年度プログラムスケジュール」を適宜参照しつつ読んで頂きたい。

プログラムは、1週間（土日を除く5日間）の日程で実施している。本学の第4学期終了が2月10日前後、成均館大学校・吉林大学の春学期の開始が通常2月末であることから、日程の確保は年々厳しくなっている。

1日の授業スケジュールについては、2020年度は日本時間9時50分、2021年度は日本時間9時30分からの開始であったが、成均館大学校の新学期の履修登録日が重なることが多く、その日1時間目の授業に参加できない学生が続出したことを受け、2022年度からは1時間遅い10時30分（中国時間9時30分）のスタートとなった。午前中に2コマ（休憩15分）、1時間の昼休みを挟んで午後更に2コマ（休憩15分）を基本とするが、授業の進行度によって休憩を早めたり1コマの長さを変えたりと、ややフレキシブルに時間を使うようにしている。ただし、オンライン授業でパソコン画面を見続けることは学生にとっても大きな負担となるため、休憩の15分は堅持するよう意識した。また、毎日の授業終了後、約1時間はZoomミーティングを維持し、学生達がグループ毎に最終プレゼンテーションの準備作業をしたり交流したりする時間を設けている。

4.4 授業

このプログラムは、主に4つの内容から構成される。以下、それぞれについて簡単に紹介する。

4.4.1 「グループディスカッション」（1日目の2・3時間目）

最終プレゼンテーションと2日目以降のディスカッションを円滑に進めるための、学生同士の関係作り（チームビルディング）を目的とする。このディスカッションでは、事前課題としてスライドを作成してもらった3つのテーマについて、日本語で話すことがメインとなる。テーマ毎にグループメンバーを変え、約30分ずつ、全部で3セッションを行う。ブレイクアウトルームに入った学生達は、順番に指定されたテーマのスライドを共有し、内容について説明をする。その後、それぞれのスライドについて質問し合ったり、お互いの共通点や相違点について話し合う。セッションを開始する前に、話す中で話題が他へ移っても構わないので、できるだけたくさん会話することを優先すること、言葉だけで通じない場合にはチャットやホワイトボード機能も活用することを指導した。

4.4.2 「テーマ別ディスカッション」（2～4日目の1・2時間目）

全参加者を半分ずつ2グループに分け、担当教員2人がそれぞれ1時間ずつ交代で、日本語によるテーマ別ディスカッションを主とした授業を実施する。この授業では、最終発表に向けて学生たちが考えるきっかけとなるような話題を提供し、3カ国の学生の意見を交換できるような授業を目指した。2023年度のディスカッションテーマは、右の通りである。

学生達にはプログラム開始前に公開する予習シート（Word資料やMicrosoft Formsを用いたアンケート）を、それぞれの授業開始までに確認・回答することを宿題として課しており、授業はその予習シートの取り組み結果をもとにしたレクチャーと、グループを更に小グループに分けてのディスカッションから構成される。できるだけいろいろな人と話をしたい、という学生からの要望に応える形で、この小ディスカッションは授業ごとに最低2回、ディスカッションメンバーを入れ替えて実施することを基本としている。

表3 ディスカッションテーマ一覧

2日目	テーマ1「年中行事と食べ物」	テーマ2「スマホ」
	①自分の国でどんな時にどんな食べ物を食べるか話す。	①各国のスマホの使用状況を比較する。
	②その習慣はどうやってはじまったかなど、その習慣について説明する。	②IT化に対する意識の比較について話す。
3日目	③あなたの住んでいる町や出身地に来る人にどの店の何を薦めるか。	
	テーマ3「私と〇〇大学」	テーマ4「コミュニケーション」
	①大学の魅力。いい点悪い点。	①外国語でのコミュニケーションにおける態度について話す。
4日目	②どうして入学したか。これから大学で何をしたいか、するつもりか。	②アサーティブであるとはどういうことか。
	テーマ5「日本人の認識」	テーマ6「日本の社会」
	①日本人がどんな時にどんな注意喚起の言葉を発するか、場面と言葉クイズに取り組む。	①ジェンダー意識について。
	②住んでいる町にあるポスターや看板の言葉を紹介する。	②世代間ギャップについて。

4.4.3 「言語別ディスカッション」（2～4日目の3時間目）

このプログラムに参加している岡大生は、その多くが大学で1年以上中国語或いは韓国語の授業を履修している。2020年度の参加者から、自分たちが学習している言語の母語話者、しかも同世代の学生と交流する機会でもあるのだから、学習言語を使って会話する時間も設けて欲しいとの声が上がっていたことを受け、2021年度で試験的に中韓両国語でのフリートークの時間を設けた（中国語履修者は吉大生とマッチングし、韓国語履修者は成大生とマッチングした）。しかし、やはり何かしらテーマがないと、話し出しにくいとの意見が参加者から出たため、2022年度から1日目のグループディスカッションで日本語で話してもらった3つのテーマを、言語別セッションにもそのまま活用することにした。スライドがあることと、一度日本語で話している内容であるため、発話に困ってもお互いに助け船が出しやすいだろうと考えたからである。2022年度・2023年度の言語別ディスカッションは、1日1テーマ、1回20分間（様子を見て最長30分間まで）、原則として日本人1人に対して学習言語の母語話者1～2人のグループ（メンバーは毎日入れ替え）で実施している。学生の様子やコメントをみると、ディスカッション初日はやや戸惑いが先に立ち、なかなか積極的になれなかったが、回を重ねると中国語・韓国語で話すことにも慣れ、話が弾むようになったようである。

この言語別ディスカッションは、もちろん岡大生に初修外国語学習の成果を発揮し、自信をつけてもらうことが第一の目的であり意義である。しかし、我々はこの言語別ディスカッションにはもう一つ、大きな意義があると考えている。それは、岡大生がこのディスカッションを通して、母語話者として「日本語学習者のサポート」をする立場から、「学習言語の学習をサポート」してもらう立場へと転換し、言語学習者として学習言語を使う事の困難さを、身を以て経験することができる、ということである。学習言語を用いる際に感じるであろう「もどかしさ」は、再び母語話者としてサポートする側に戻ったとき、相手の立場や状況をより深く理解・想像しようとする姿勢を育むことに繋がるだろう。同じことは、岡大生だけでなく、日本語学習者として本プログラムに参加する成大生・吉大生にも言える。役割が入れ替わることで、学習者と支援者双方の抱える困難さに気づくことができるのである。その意味で、時間は短いものの、この言語別ディスカッションがプログラムで果たす役割は極めて重要且つ大きいものとなっている。

4.4.4 「最終プレゼンテーション」（1～4 日目 4 時間目、5 日目）

このプログラムのメインは、日本語による最終プレゼンテーションである。最終プレゼンテーションでは、原則として各大学から 1 名ずつ計 3 名で構成されるグループを作り⁽⁵⁾、グループメンバーの興味関心をすりあわせて発表テーマを決め、協力して調査・考察・資料作り・プレゼンテーションを行う。なお、プレゼンテーションは日本語学習者である成大生・吉大生が担当し、岡大生はグループのプレゼンテーション全体の司会と PPT の共有・操作を担当する。

2021 年度までは、プログラム 1 日目のグループディスカッション後に、それぞれ関心のあるテーマについて Miro に書き込んでもらい、それを元に教員がグルーピングを行っていたため、プレゼンテーショングループでの活動は実質的に 2 日目以降、5 日目のプレゼン当日までたった 3 日しかなかった。しかし、やはり参加者からプログラム自体が 5 日間しかないのだから、1 日目から最終プレゼンテーションへの準備を行いたいという意見が上がった。それを受け、2022 年度からは応募書類やオリエンテーションでのディスカッション結果をもとに、プログラム開始前に教員側でグルーピングを行っておき、1 日目の 4 時間目に最終プレゼンテーションのグループメンバーを発表、そのままグループでの最初の話し合いに移る、という方式に変更した。

1 日目にはグループ毎に「計画シート」を Zoom のチャット画面を通して全員に配付し（Moodle にも掲載）、グループ名、プレゼンテーションのテーマ、期間中の連絡手段、作業計画について話し合わせる。この「計画シート」は、各グループの岡大生が記入し、当日夜 9 時まで Moodle 上の指定場所に提出する。担当教員は提出された「計画シート」を確認し、テーマをチェックする。なお、この段階でテーマに重複があったとしても、原則として特に変更を求めることはせず、最終日のルーム分けで似たテーマ同士を別にすることで対応している。

2020 年度～2023 年度のプレゼンテーションテーマは、右の通りである。

昨今の K-POP の流行が影響しているのか、毎年必ず音楽関係のテーマが登場する。しかし、カラオケに注目したりファン文化に注目したりと、どの発表も基本的に切り口が異なるのが興味深い。勿論シンプルに流行曲を調査する場合でも、例えば 2023 年度の「流行している音楽」では、三カ国の若者が音楽を楽しむ際のツールについても調査しているなど、学生達の独自の視点が窺える。

音楽と同様に人気があるテーマが食文化である。日常生活に密着したテーマであるだけに、相対的に調査・考察がしやすいことが原因だと思われる。特にお菓子やお酒に関わるテーマが多いのは、それらが普遍的に好まれやすいことが関係しているかもしれない。

2～4 日目は、グループごとにブレイクアウトルームに入り、それぞれ自分たちの「計画シート」の計画に沿う形で（適宜変更は可）、調査や PowerPoint (PPT) 作成、プレゼンテーション用の原稿作りや日本語の練習等を行っていく。この間、教員はメインルームで待機し、ブレイクアウトルームの様子を主にマイクマークの動きによって会話量をモニターしつつ、学生からのヘルプ要請があった場合に速やかに対応できるようにしている。授業時間終了後も、学生達が作業をスムーズに行えるよう、1～2 時間程度はミーティングを終了せず、ブレイクアウトルームを自由に使えるようにしたところ、毎回 3～5 組程度は残って作業をしている様子であった。

表4 プレゼンテーションテーマ一覧

2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
結婚文化について	三国の伝統的なお菓子	カラオケ	日本・中国・韓国の恋愛の形について
統治者の家 ～共通点と相違点～	3カ国のファン文化	関西地方と上海の特徴を 比べる	お酒の文化について
食事のマナーについて	3カ国の音楽～流行し ている曲を比較する～	日中韓3カ国の文学につ いて	三国の人気の食べ物
日中韓のインスタントラー メンについて	3カ国のアニメ・マン ガについて	三カ国の金銭感覚につ いて	日中韓3国で流行してい る SNS の種類考察
各国の伝統のお菓子の比較	流行について	三国の縁起がいいものと 悪いものについて	韓中日の入試制度
3カ国の若者言葉の比較	音楽のトレンドと K-POP	各国のオリンピックのス ポーツについて	コンビニの違い
日韓アイドルの違いにつ いて	インスタントラーメン について	3カ国のお正月について	流行している音楽
	三カ国の高校生活につ いて	三カ国の流行語について	三国の発酵文化
	「家族のつながり」に ついて	伝統酒と作法	
		日中韓の家族と大学での 呼称について	

5 日目はプレゼンテーション当日である。1 時間目はプレゼンテーションに向けて最後の資料確認と練習をグループ毎に行う。2・3 時間目がプレゼンテーション本番である。オンラインであることと時間的な制約の都合上、全グループを 2 つ或いは 3 つのルームに振り分け、1 グループ 25～30 分の持ち時間で、プレゼンテーションと質疑応答を行う。なお、順番は前日のうちにオンライン上の発表順決定ツールを用いて決定している。

この発表会には、岡山大学初修外国語系教員が原則として全員オーディエンスとして参加するほか、成均館大学校・吉林大学の担当者も招待する。各ルームは共同ホストに指定した初修外国語系教員が録画し、後日期間限定公開する。これは、主にプログラム担当教員が参加できなかったルームの発表を視聴し、評価するためだが、同時に学生達にも自分たちのルーム以外の発表を聞く機会を確保するためでもある。なお、学生達には最終日の課題として Microsoft Forms で自分たち以外のグループへのコメントをできるだけたくさん書き込むことを課しており、集まったコメントはプログラム終了後に発行する「成果報告書」にグループ毎に掲載している。

発表会終了後の 4 時間目は、オーディエンスの先生方とプログラム担当者による講評・コメントと、プログラム全体の総括、記念撮影（スクリーンショット）を行う。時間がある場合は、さらにグループ毎のブレイクアウトルーム（移動自由）を開き、学生同士が互いをねぎらい、最後の交流をするための場を提供している。

表 5 評価用ルーブリック

なお、このプレゼンテーションの評価は、表 5 のルーブリックを事前に公開したうえで、担当教員がそれぞれ個別に評価し、その平均点を最終的な評点として、成績に組み込んでいる。

以上が、プログラムの主な内容である。この他、毎日 10 分程度ではあるが、大学単位でブレイクアウトルームに集ってもらい、それぞれの母語で最終プレゼンテーションの進捗状況の共有や、困りごとがないかなどを話し合う「大学別セッション」も実施している。オリエンテーション時に、各大学の参加者間でリーダー役を決めてもらっているため、セッションで話し合った内容についてはリーダーから報告を受け、必要に応じてフィードバックやアドバイスを行っている。

		5 点	3 点	1 点
聞き手 配慮	態度	・声の調子・大きさがちょうどいい。 ・原稿を読んでいる感じがなく、聴衆（audience）を見ながら発表できる。	できている	あまり できていない
	表現	・フォーマルな発表にふさわしいスタイル（です・ます体）で話している。 ・発表にふさわしい表現を使い、正しいポーズでわかりやすい発音で発表している。 ・発表の構成と進行に関する表現を使って発表している。 ・質問がわからなかった時、質問者の質問を確認したり、理解を確かめたりできる。	できている	あまり できていない
内容	構成	8 つの部分が全て見られ、順番が適切である。 <8 部分> 1. タイトル 2. 目次 3. テーマを選んだ理由・目的 4. 調査の方法と予測 5. 調査の結果 6. 考察 7. 結論 8. 今後の課題	できている	あまり できていない
	論理的 つながり	論理的に文をつなげて、段落で流れのある話をしている。	できている	あまり できていない
	深さ	話しているトピックについての深く正確な知識を引用、比較しながら、自分自身の意見を表現している。	できている	あまり できていない
資料	PPT	自分の意見の根拠となる資料が効果的に用いられており、説明も明確である。	できている	あまり できていない

4.5 評価

岡大生と成大生・吉大生で評価の内容が異なるが、いずれも60点以上の取得で合格とする。合格すれば、岡大生には集中講義の単位（「知的理解（現代と社会）」1単位）が認定されるほか、合格者全員に修了証書を発行する。

【岡大生】

- ①事前オリエンテーションおよび授業への積極的な参加・課題提出等 80%
- ②集中講義終了後の学習効果レビュー（レポート） 20%

【成大生・吉大生】

- ①事前オリエンテーションおよび授業への積極的な参加・課題提出等 40%
- ②最終プレゼンテーション 60%

評価対象となる「課題提出」は全学生共通で、具体的には以下の通りである。

【事前課題】⁽⁶⁾ ①自己紹介動画 ②自己紹介スライド

【課題】

- ①1日目：「自己目標 My Goals」（Microsoft Forms）
- ②1～4日目：「リフレクションシート」（Microsoft Forms）⁽⁷⁾
- ③5日目：「発表に対するコメント」（Microsoft Forms）
「プログラム終了アンケート」（Microsoft Forms）

なお、岡大生の最終レポートは特に書式・分量等の指定はなく、期限内に提出されたかどうか、プログラムを通しての気づきや成長、或いは課題といった発展的要素が書かれているかどうかで総合的に評価している。

5. プログラム評価

本プログラムでは、プログラム終了時に全学生を対象として、Microsoft Formsを使った終了アンケートを実施している。岡大生と成大生・吉大生とでアンケート項目は異なるが、ここでは共通項目を中心に、2023年度の回答から抜粋する形で、プログラムに対する評価や学生達から寄せられたコメントを紹介していく。なお、終了アンケートの全項目と結果は、「成均館大学校交流プログラム」時代から全て、その年の「成果報告書」に収録されている。関心のある方は執筆者までご連絡頂ければ、閲覧することが可能である。

このアンケートを実施するに当たって、個人名は担当教員を含め誰にも特定されないことがないこと、参加は自由意思であり拒否に於ける不利益はないこと、並びにアンケート結果は担当教員等の授業改善や研究のために用い、成果報告書等に於いて匿名で公開することについて口頭で説明し、参加者全員から了承を得ていることを附記しておく。

5.1 終了アンケートの結果

5.1.1 プログラムの期間について

表 6 アンケート結果 1 「プログラム期間」

年度 大学	2020 年度				2021 年度				2022 年度※1				2023 年度			
	長ず ぎる	ちょ うど	短ず ぎる	その 他	長ず ぎる	ちょ うど	短ず ぎる	その 他	長ず ぎる	ちょ うど	短ず ぎる	その 他	長ず ぎる	ちょ うど	短ず ぎる	その 他
岡山	0	6	5	0	0	6	1	2	0	9	2	1	0	8	1	1
成均館・吉林	0	8	6	0	1	12	4	1	0	15	4	2	0	8	7	0
計	0	14	11	0	1	18	5	3	0	24	6	3	0	16	8	1

※1 2022 年度は成均館・吉林の結果に重複回答がある。以下の表でも同様。

2021 年度及び 2023 年度は、期間中に土日を挟んだことで発表までの時間をやや多く確保できたが、2020 年度と 2022 年度はそれが叶わなかったため、全体としてかなりタイトな授業運営を余儀なくされた。特に 2020 年度の評価に「短すぎる」が目立つのは、学生側も教員側もオンラインでのプログラム参加・運営にまだ慣れておらず、試行錯誤せざるを得なかったことも一因であろう。全体としては、「ちょうどいい」が全体の 6 割を締め、次いで「短すぎる」が約 3 割となっている。また、「その他」を選んだ学生も基本的には「ちょうどいい」か「短すぎる」のいずれかに分類できるコメントを書いていることからすれば、プログラム期間は概ね適当な長さであると言えるだろう。

岡山大学の第 4 学期終了時期と、成均館大学校・吉林大学の春学期開始時期の関係上、期間そのものをこれ以上長くすることは難しいが、今後は出来るだけ間に土日を挟むことによって、少しでも多くの時間を確保したい。

5.1.2 プログラムの終わりに発表することについて

回答は「やってよかった」「やってよかったが大変だった」「他のことがよかった」「難しかった」「その他」の 5 つの項目から選択するよう、全大学で統一している。なお、表では各回で回答のあった項目のみを挙げる。

表 7 アンケート結果 2 「プログラムの終わりに発表することについて」

年度 大学	2020 年度※1		2021 年度				2022 年度		2023 年度	
	やって よかつ た	やってよか ったが、大 変だった	やって よかつ た	やってよか ったが、大 変だった	他のこと がよかつ た	難しか った	やってよ かった	やってよか ったが、大 変だった	やってよ かった	やってよか ったが、大 変だった
岡山	5	6	3	6	0	0	6	6	4	6
成均館・吉林	10	4	3	12	2	1	8	13	9	6
計	15	10	6	18	2	1	14	19	13	12

※1 成均館・吉林は、2020年度についてのみ「やってよかった」「ちょうどいい」「他のことがよかった」から選択評価のため、「ちょうどいい」を「やってよかったが大変だった」に読み替えている。

2021年度がやや割れたが、基本的には「やってよかった」と感じている学生ばかりであると言ってよいだろう。コメントにも「大変だったがやりがいを感じた。チームメンバーとの交流が必須になるので仲も深まりやすかったように思う」「やりたいことが違ったので大変だったが、達成感があった」「他の班の発表を聞くことで三カ国の違いについてよく理解できた」など、概ね好意的なものが多かった。しかし一方で、やはり短期間でのハードスケジュールということからか、「時間に追われるような感じがした」という意見もあった。

5.1.3 学生同士の交流について

全員に対して「成均館・吉林大学の学生との交流について」、成大生・吉大生には更に「岡大生との交流について」という項目でも、自由記述をしてもらった。2022年度・2023年度の回答から、抜粋して紹介する。

まず、表7は「成均館・吉林大学との交流について」という項目の回答である。

表8 成均館・吉林大学の学生との交流について※1

大学	コメント
成吉※2	コミュニケーションがしやすかったです。優しかったです。
成吉	お互いの日本語を分かることは難しいけど、他の文化の中の人たちと一緒に話すことは楽しかったです。
成吉	国際の視野を広げた、皆んなと話すことは幸せです。
成吉	同じ学校同士知らない人も多いので、ああいった時間も必要だと感じました。
成吉	もっと仲良くなりたいと思いました。
成吉	お互いの学校をより良く理解し、そして文化の交流を促進するのに役立ちます。
岡山	彼らの日本語力にとっても驚いた。私ももっと頑張らなくてはいけないと感じた。
岡山	短い時間でオンライン上だったけど、いろんな人の意見を聞いて自分にたくさんの刺激をもらえた。
岡山	すごく楽しかった。またやりたいです。
岡山	1週間はあっという間で、終わってしまうのが悲しくなりました。
岡山	日本語や日本の文化についてご存じの方が多く、日本の共通認識を持った状態で他国の話を聞くことができたためいろいろな観点で知ることができました。
岡山	意外と私たちと変わらない普通の学生だった。

※1 コメントは学生が記入した文章をそのまま掲載している。表9も同様。

※2 匿名のアンケートのため、成均館・吉林大学いずれの学生かは特定できない。表9も同様。

この中で最も印象的なのは、岡大生の「意外と私たちと変わらない普通の学生だった」というコメントであろう。日本という国しか知らない多くの学生にとって、初めて真剣に向き合う「外国人」が同世代の、しかも日本語を学び日本に関心を持っている大学生であるということは、大変幸運なことである。「日本人」が「外国人」と交流する際に生じやすい心理的ハードルをかなり押し下げてくれるからだ。そして、国が違い言語が違い文化が違うということで膨らんでいた畏れは、実際に話し協働するうちに、相手もただ自分と同じ「普通の大学生」であることに気づいて消失する。このことの意義はとても大きい。なぜなら、外国人に限らず日本人同士とであっても、他者を「知ること」が如何にコミュニケーションにとって重要で、偏見や未知への畏れを打ち破ってくれるものであるかを、身を以て体験したことになるからである。もちろん、これと同じことは成大生・吉大生についても言えるだろう。

次に、表 9 は成大生・吉大生の「岡山大学の学生との交流について」という項目への回答を抜粋したものである。

表 9 岡山大学の学生との交流について

大学	コメント
成吉	学生はみんなとてもやさしいでした。ゆっくり話してくれて分かることが安かったです。
成吉	とても気長です、感謝している！
成吉	もっと多くの学生と交流できればと思いました。
成吉	よかったし、このような機会が多かったらと思います。
成吉	岡山大学の学生さんは責任感があり、交流の中でたくさん助けてくれました。
成吉	いろいろお世話になったから心より感謝している。
成吉	皆ができるだけ気楽に会話を続けられるように助けてくれた。
成吉	とても親切で積極的だったので、会話をしているとグループ活動の時間が短いと感じるほどでした。
成吉	誰もが歓迎し、フレンドリーでした。
成吉	いつも優しく手伝ってくれて本当に感動しました。日本語の上達もありましたが、臆することなく話せるようになりました。

このプログラムに参加する岡大生には、成大生・吉大生の日本語学習をサポートしてもらうに当たって、オリエンテーション時に「分かりやすい日本語」について、日本語担当教員が簡単なレクチャーを行っている（4.1 参照）。実際の交流に当たって、この時の内容を思い出して例え方を工夫したり、言い換えを試みたりした、と報告してくれた岡大生もいた。また、成大生・吉大生のコメントからも、彼らが日本語の母語話者として相手の言

葉を理解したり、自分の言葉を分かってもらったりするためにはどうすればよいかを真剣に考えながら活動してくれたことが窺える。そして、コメントに見える「気楽に」「フレンドリーに」「歓迎し」「臆することなく」というキーワードは、このプログラムで学生達に身につけて欲しいと考えているコミュニケーションの姿勢を表すものでもある。岡大生達が見事にその期待に応えてくれている証左といえよう。

5.1.4 プログラム全体について総合評価（満足度）

プログラムの満足度については、1～10までの10段階（10が最高値）で回答してもらっている。2020年度～2023年度の結果の集計は以下の通りである。

表 10 プログラム全体の満足度

年度	成均館大学校・吉林大学	岡山大学	総合
2020年度	9.14	9.18	9.160
2021年度	8.75	9.88	9.315
2022年度	9.27	9.50	9.385
2023年度	9.53	9.50	9.515

概ね毎回9点以上と、高評価を得ることができている。参加者数が異なるため、正確な比較とは言えないが、総合点も毎年少しずつ高くなっている。

5.2 終了アンケートについての総括

2021年度以降は、実施する側の我々担当教員が少しずつこのスタイルでの授業に慣れ、当初過重気味だった学生の負担減（Microsoft Formsの活用など）や、最終プレゼンテーションへの取り組みがしやすくなるよう授業時間後のZoomミーティング維持といった取り組みをしたことが、最終的な満足度の高さに影響しているだろう。また、学生からの要望に応える形で、グループ別・大学別以外に言語別のディスカッションを増設したり、ディスカッションのグループ分けをできるだけいろいろな人と組み合わせるよう工夫したりしたことも、その一因であろう。オンラインプログラムとして、一定の水準には達することができたと言えるのではないだろうか。

一方で、「このプログラムをよくするために、やってほしかったこと」を聞いた項目では、例年必ず「オンラインではなく対面でやって欲しかった」「対面だったらもっとよかった」という意見が日中韓全ての学生から挙がっている。これについては、キャンパスアジア事業が終了し、純粹に初修外国語系だけで運営している現状では、受入に係る諸手続・対応に必要なマンパワーの不足や時間的制約によって、残念ながら実現困難といわざるを得ない。しかし、このプログラムでの経験が、次は実際に岡大に留学してみたい、或いは中国・韓国に留学してみたい、と学生達が考える原動力の一つとなっていることは確かだ。

ある。オンラインであっても、「岡山大学の国際交流事業」として十分に意味のあるプログラムであると考えている。

6. まとめと今後の展望

大学を卒業した後、かつてないスピードでグローバル化が進む社会で働き、生活していくことになる岡大生達にとって、短期間ではあるが異なる言語・文化をバックグラウンドとする相手と協働して何かを成し遂げたというこのプログラムでの経験は、極めて重要な意義を持つだろう。

このプログラムでは、日本語を学習する韓国・中国の学生と岡大生が日本語で交流するだけでなく、岡大生自身も学習言語の母語話者と学習言語を使って会話する時間を持つことができる。つまり、参加学生は全員が言語的マジョリティとマイノリティ両方の立場を、身を以て経験することになるのだが、異文化への理解と、どんな文化的背景を持つ相手とでもコミュニケーションを取ろうとする姿勢、そして互いへの配慮と尊重は、こういった経験を経てこそ身についていく。その意味で、このプログラムは単に岡大生の初修外国語への学習意欲を涵養・促進するだけでなく、市民性を育てる場と言えるだろう。

今後は、毎年のようにアクセスできない・共有ができない等のトラブルが起きる、Zoomやホワイトボードアプリをはじめとするオンラインツールを、より確実且つ効果的に使用できるよう、教員側にもスキルアップが求められるだろう。また、岡大生に限って言えば、今後は対面でのオリエンテーションだけでなく、プログラム開始前の交流機会を増やすことを検討していきたい。これまで4回オンラインで実施してきた経験上、日本人同士のコミュニケーションがうまく取れていると、全体の雰囲気も和やかでスムーズに運営しやすいと感じているからである。

最後に、コロナ禍以後、かつて無い円安も相俟って、現実の国際交流が萎縮する状況のもと、本プログラムの実践がオンラインを用いた国際交流のモデルの一つとなることを期待している。

注

(1)2022年度までは10名程度として柔軟に対応していたが、オンラインでは全体の数が多いと実施上困難を伴うことが明らかになったため、2023年度より10名までとし、応募者多数の場合は選考を行う事を募集要項に明記した。

(2)2020～2022年度までは全大学ともZoomを使ってオンラインで実施。

(3)例えば、岡大生対象のオリエンテーションでは、例年「自分の第一印象について人からよく言われること」と「それについて自分が思っていること」をお題にしている。

(4)履修授業の関係で1名が欠席したため、当日の参加者は9名であった。

(5) 毎年各大学の参加者数にばらつきがあるため、4人グループや2校グループでプレゼンテーションを行う事もある。2023年度については、各大学1名ではなく、日中韓国語の母語話者が1人ずつ、になるようグルーピングを行っている。

(6) 詳細は「**4.2 事前課題**」を参照。

(7) 質問項目は日によって異なるが、基本的に毎回①授業の内容で印象に残ったこと、②他の大学の学生と交流して気がついたことや難しかったこと、③自分の学習態度（思考・判断・表現・協力）について、自由記述や点数によって回答してもらっている。

2023年度 成均館・吉林大学交流プログラム

（日本語・日本文化プログラム） 2024. 2. 14～2024. 2. 20

目的：規定のトピックについてディスカッションを通じて交流する相手との違いに気づく。文化の多様性・複雑性に気づき、その背景にある文化・社会・歴史的意味を探究しようとする態度を身に着ける。

Objective: To become aware of differences with the people with whom one interacts through discussion of prescribed topics. To become aware of the diversity and complexity of cultures and develop an attitude of inquiry into the cultural, social, and historical meanings behind such diversity and complexity.

	Part1	Part2	Part3	Part4
日本・韓国時間	10:30~11:30	11:45~12:45	13:45~14:45	15:00~16:00
中国時間	9:30~10:30	10:45~11:45	12:45~13:45	14:00~15:00
2/14 水	オリエンテーション	自己紹介		発表準備
指導教員	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂
授業内容 Lesson Content	Zoom接続 ・授業目標とスケジュールの確認 ・授業と最終発表の説明 ・Connecting to Zoom ・Confirmation of class goals and schedule ・Explanation of class and final presentation	・グループごとにPPTによる自己紹介 ①一週間の食べ物 ②好きなものや人 ③お気に入りの場所（基本使用言語：日本語） ・Self-introduction by PPT for each group ①Food eaten during the week ②Favorite thing and person ③Favorite place (Basic language: Japanese) ※ただし、必要に応じて英語や韓国語・中国語も使用可 English, Korean and Chinese can be used if necessary.		・最終発表についての説明1 ・発表準備 ・Explanation of final presentation 1 ・Preparation for presentation
2/15 木	講義+ディスカッション1	講義+ディスカッション2	言語別ディスカッション等	発表準備
指導教員	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂
授業内容 Lesson Content	グループA 佐藤先生 テーマ1「食べ物」 Group A Ms. Sato Theme1「Food」 グループB 秋田先生 テーマ2「物」 Group B Ms. Akita Theme2「Thing」	グループB 佐藤先生 テーマ1「食べ物」 Group A Ms. Sato Theme1「Food」 グループA 秋田先生 テーマ2「物」 Group B Ms. Akita Theme2「Thing」	・韓国語／中国語による テーマ別ディスカッション （①一週間の食べ物） ・国別セッション ・Discussions by theme in Korean/Chinese ①Food eaten during the week ・Country-specific sessions	・最終発表についての説明2 ・発表準備 ・Explanation of final presentation 2 ・Preparation for presentation
2/16 金	講義+ディスカッション3	講義+ディスカッション4	言語別ディスカッション等	発表準備
指導教員	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂
授業内容 Lesson Content	グループA 佐藤先生 テーマ3「場所」 Group A Ms. Sato Theme3「Place」 グループB 秋田先生 テーマ4「コミュニケーション」 Group B Ms. Akita Theme4「Communication」	グループB 佐藤先生 テーマ3「場所」 Group A Ms. Sato Theme3「Place」 グループA 秋田先生 テーマ4「コミュニケーション」 Group B Ms. Akita Theme4「Communication」	・韓国語／中国語による テーマ別ディスカッション （②好きなひと・もの） ・国別セッション ・Discussions by theme in Korean/Chinese ②Favorite thing and person ・Country-specific sessions	・最終発表についての説明3 ・発表準備 ・Explanation of final presentation 3 ・Preparation for presentation
2/19 月	講義+ディスカッション5	講義+ディスカッション6	ディスカッションまとめ	発表準備
指導教員	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂
授業内容 Lesson Content	グループA 佐藤先生 テーマ5「言葉」 Group A Ms. Sato Theme5「Language」 グループB 秋田先生 テーマ6「日本の社会」 Group B Ms. Akita Theme6「Japanese Community」	グループB 佐藤先生 テーマ5「言葉」 Group A Ms. Sato Theme5「Language」 グループA 秋田先生 テーマ6「日本の社会」 Group B Ms. Akita Theme6「Japanese Community」	・韓国語／中国語による テーマ別ディスカッション （③好きな場所） ・国別セッション ・Discussions by theme in Korean/Chinese ②Favorite Place ・Country-specific sessions	・最終発表についての説明4 ・発表準備 ・Explanation of final presentation 4 ・Preparation for presentation
2/20 火	発表前準備	発表		講評及びまとめ
指導教員	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂	秋田節子・佐藤美穂
授業内容 Lesson Content	・発表準備 ・Preparation for presentation	・グループ発表 ・Final presentation by each group		・講評 ・プログラムのまとめ ・Review of the Presentation ・Program Summary